「妻と夫への勧め」　2026 年 01 月 29 日

同じように、妻たちよ、自分の夫に従いなさい。たとえ御言葉に従わない夫であっても、妻の無言の振る舞いによって、神のものとされるようになるためです。神を畏れ敬うあなたがたの清い振る舞いを見るからです。あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りを身に着けたり、衣服を着飾ったりするような外面的なものではなく、柔和で穏やかな霊という朽ちないものを心の内に秘めた人でありなさい。これこそ、神の前でまことに価値があることです。かつて、神に望みを置いた聖なる女たちも、このように装って、夫に従いました。例えばサラは、アブラハムを主人と呼んで、彼に従いました。あなたがたも、善を行い、また何事も恐れないなら、サラの子どもとなるのです。同じように、夫たちよ、妻を自分よりも弱い器だとわきまえて共に生活し、命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい。そうすれば、あなたがたの祈りが妨げられることはありません。（Ｉペトロ３：1～7）

著者は続いて、妻と夫に対する勧めの言葉を書いている。「妻たちよ、自分の夫に従いなさい。」聖書では、妻は夫に対して常に「従う」者で、女は男の「助け手（創世記 2:18)」であると「従者」に位置づけている。著者は、夫に従うことによって、「たとえ御言葉に従わない夫であっても、妻の無言の振る舞いによって神のものとされるようになるためです。神を畏れ敬うあなたがたの清い振る舞いを見るからで」あると言う。著者は女の感化力の強さを知っている。確かに、妻の熱心な信仰生活を見て、信仰に導かれる夫は多い。妻たちには「髪を編んだり、金の飾りを身に着けたり、衣を着飾ったりするような外面的なものではなく、柔和で穏やかな霊という朽ちないものを心の内に秘めた人でありなさい」と勧めている。外面を飾ることではなく、柔和で、穏やかな霊という朽ちないものを心に秘める内面を整えるべきである。内面の装いこそ、神の前で価値がある。外面を飾ることを嫌う女性はいないと思うが、内面からかもし出る美しさは何にも替え難いものであることは確かである。「かつて、神に望みを置いた聖なる女たちも、このように装って、夫に従いました。」そして、アブラハムの妻サラについて語っている。「サラは、アブラハムを主人と呼んで、彼に服従しました。あなたがたも、善を行い、また何事も恐れないなら、サラの子どもとなるのです。」サラは、行き先も知らずに出発したアブラハムに従い、生涯を共にしたのだから、夫に服従した妻と言える。しかし、自分に子どもが生まれなかったため、女奴隷ハガルを夫に与え、生まれて来る子どもを我が子にしようとした。アブラハムはサラの言葉を受け入れた。イサクの妻リベカも、ヤコブの妻たちレア、ラケルも夫に従っているが、諸々の出来事を見ると、実質的には妻が仕切っているように見える場面も多い。ただ、彼女たちが夫に従ったということに異論はない。著者は、その従順を称え、見倣うように諭している。妻への勧めは家父長的家族を支える価値観であることは否めない。

夫に対しては、「夫たちよ、妻を自分よりも弱い器だとわきまえて共に生活し、 命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい」と勧める。妻が夫より弱いとは限らないし、強いこともあるだろう。「命の恵みを共に受け継ぐ者として尊敬しなさい」という勧めの言葉は素晴らしい。著者は、夫が妻を尊敬し、共に生きる時、二人の祈りは神に顧みられると諭している。夫婦が同じキリスト教信仰にあれば、互いに神に向き合い、良い関係を結べるだろう。連れ合いも命の恵みを共に受け継ぐものであることを信じるから、尊敬して受け入れ、愛し、共にあることを喜ぶのである。